

アメリカ社会の始まりと民主主義

本 城 精 二

序

今日我々がアメリカ社会とかアメリカの歴史と言うとき、通例は先住民を無意識のうちに除外しているのが実情である。実際のところヨーロッパ人が関与している社会や歴史をそのように呼んでいるのである。アメリカの歴史といえばコロンブスのアメリカ大陸到達から始まる、というのが通例の扱いである。またアメリカの社会と言え、ヨーロッパから移民してきた人々によって始められ、建設された社会であり、端的な言い方をすれば17世紀以降のアメリカを指している。

しかしアメリカの大地は地質学的には長い歴史があり、「インディアン」と呼ばれていた人々が原住民として、数万年に亘って生活してきた事実があることは否めない。氷河期にベーリング海が凍結しアイス・ブリッジともランド・ブリッジとも呼ばれる状態であったとき、ユーラシア大陸から現在のアメリカ大陸へやって来た人々が原住民と呼ばれる人々の祖先である。白人の移民よりはるか以前から生活し、彼ら独自の社会を築き営んできたのである。そのような歴史的事実を無視して、17世紀以降のアメリカをアメリカ社会と無頓着に呼んでいるのである。その可否は別に、それが現実である。そういう通念に従って、ここでも17世紀以降のアメリカをアメリカ社会として言及していることを断っておかねばならない。

アメリカのことを論じる時に必ず出される特質として次の3つのことが挙げられる。まず国土が広大であること、多民族国家であること、そして歴史が浅いこと。これらを念頭に置いておく必要がある。

アメリカは多民族国家であり、多文化社会であるが、もし歴史が長ければそれぞれの持つ特質が融合されて、新たなものが出来上がるであろう。しかし現実には歴史が浅いために、移民してきた民族ごとの特質を保ったまま、アメリ

カ社会のそれぞれの部分を形成しているのである。そのような一部分ごとの寄り集まりが全体としてのアメリカを形成しているのである。

ハイフン付きのアメリカ人ということばがある。たとえば日系アメリカ人とか、ロシア系アメリカ人とか、ギリシャ系アメリカ人とかいう類である。それぞれの出身を示す表現であるが、それは同時にそれぞれの出身地の持つ特質を保持していることを示すものである。そのような「ハイフン付き」つまり「系」の持つ特徴は外見上消えることはないだろう。しかし今後極めて長い年月を経たら、そのような外見上の特徴は消えているかもしれない。また文化的にも同様に、極めて長い年月を経たら、多民族の文化が融合してひとつになっているかもしれない。しかし現実にはまだそこまで至ってはいない。多民族国家の多文化社会は歴史の浅いアメリカの現実であると言わざるをえない。このような特質を踏まえてアメリカ社会の始まりと、アメリカの民主主義について言及してみたい。

I. 移民のはじまり

ヨーロッパの人々は何故新天地としてアメリカへ移民したのであろうか。移民が始まった17世紀に大西洋を渡ることは危険を伴う難行であっただろう。また祖国を離れ、親族友人とも永遠の別れを覚悟して、当時は新世界と言われていたアメリカへ渡ることは一大決心が必要だったと容易に推測できる。それでもアメリカへ渡るに値する要因がヨーロッパにはあったのである。どうしても新しい天地を求める必要があったから、危険を承知の上で、また親族や友人との永遠の別離を覚悟して大西洋を渡り、新たな生活をアメリカで実現させようとしたのである。危険を承知の上で大西洋を渡るにはそれなりの動機があったであろうと推測できる。その中で最も重大な動機は宗教上の自由あるいは経済的自由または身分上の自由を求めることであったと言えるだろう。

ヨーロッパから移民して最初の植民を開始したのは、1607年ヴァージニアのジェームズタウンJamestownである。それは本国イギリスの経済的かつ政治的な意図が働いていたのである。確かにジェームズタウンはその後の南部における植民の進展に大きな足がかりとなったのは事実である。そこを拠点として植民地は拡大していったのである。特にヴァージニアから南の植民地の拡大には

大きな推進力となったのは否めないであろう。そしてそこに南部的特徴を帯びた社会の始まりがあったと言えるだろう。

Over 140 men and boys from a settlement at Jamestown, Virginia; approximately one-half die before the end of the year. Jamestown will become the second oldest town in North America, after Saint Augustin, and the first permanent British settlement.¹

このようにアメリカへ移住しても生き残ることは困難を極めたのである。比較的気候が温暖なヴァージニアですら、冬を越すことは過酷な試練である。しかしそれでも恒久的なコロニーとして成功したという事実が次の移民を促す結果となり、次々とヨーロッパから移民が続いたのだと推認できる。

植民が始まった時、ヨーロッパの国々は国王を頂点とする王国である。従って身分上の階級制度のため、下層階級の生活は決して望ましいものではない。そのような不満を解消してくれるのは新天地へ移民することである。ヨーロッパでは生活の向上を望めなかった富裕層以外の者でも、アメリカへ移住することで様々な生活向上の可能性が与えられていた。だからヨーロッパから次々と故郷や親族友人と別れて新天地のアメリカを目指したのである。

南部の植民地では労働力を補うために年季奉公人という制度があり、これがヨーロッパからの移民を後押しした結果を招いている。

これはヨーロッパから北米のイギリス領植民地へ渡った移民で、到着後一定期間の不自由労働を義務づけられた人たちのことで、ニューイングランド以外の北米植民地への渡航者の半数以上を占める重要な労働力源でした。²

この引用文が示す通りアメリカの中部、南部への移民にはこの奉公人制度が大きな推進力となっていたことは事実として受け止めてよいだろう。しかもそのような労働力源としてのヨーロッパ人の移民は黒人奴隷より多かったのである。そのことは「このような年季契約移民が、17世紀には南部植民地に多く、その数は黒人奴隷を上回りました」³という専門家の言葉が証明している。

ヴァージニアが南部の植民の拠点であったのに対して、アメリカ北部の植

民の拠点はマサチューセッツ湾植民地である。その中で最初のものはプリマス・プランテーションPlymouth Plantationである。1620年11月、メイフラワーMayflower号でプリマスPlymouthへやって来た「ピルグリム・ファーザーズPilgrim Fathers（巡礼始祖）」と呼ばれる約100人の一団である。彼らはプリマスに上陸し小さな集落を築いた。それから1年以内に飢えと寒さのために半数あまりの人びとが亡くなっている事実が示す通り、新天地の生活は決して甘いものではなかった。彼らは狩猟や農耕に長けてはいなかったし、また気候や風土が祖国のヨーロッパのものとは異なり、生活は厳しく、特に冬の餓えと寒さは彼らが予期していた以上に厳しいものだったということは容易に想像できよう。

しかし親切な原住民に助けられながらようやく1年を生き延びた人びとは、秋の収穫を感謝して3日間の祭りを開いたのであった。それが感謝祭のはじまりである。またそれはアメリカで始まった年中行事のひとつである。1621年に始まった感謝祭がニュー・イングランド全体に広がり、やがて全国レベルのものになり、リンカーン大統領の在任中に法的にも祝祭日となったのである。それが今日では世界的なものになっているのである。

プリマスに続いて1628年にセイレムSalem、そして1630年にボストンBostonといった植民地が建設され、北部の植民地社会のはじまりである。これらがニュー・イングランドの植民開始の起爆剤となり、次々とニュー・イングランド各地にヨーロッパから移民してきた人々が先住民を追いやって、彼らの土地を奪ってそれぞれの白人集落を建設していったのである。実をいえば、その後のアメリカ社会の教育への貢献や文化的な発展に大きく寄与しているのは、ニュー・イングランドやその周辺の地域に入植した人々とその子孫たちである。

上に述べた通り、北部植民地への移民の要因は宗教的なものであるが、その背景にはヨーロッパの宗教改革がある。ヨーロッパで宗教改革の嵐が吹いていたとき、イギリス国内も例外ではなかった。イギリス国内で宗教を改革しようと試みた人々は迫害にあった。そのために新天地で自分たちの自由な信仰を求めたいという人々が現れたのである。「分離派」(Separatist)と呼ばれる一派である。当時宗教は生活の中心であり、自分の好きなように信仰することはなによりも重大なことであった。

その後植民が進み、「以後一世紀余りのあいだに、北はニューハンプシャー

から南はジョージアにいたるまでの大西洋岸に、独立13州と後に呼ばれるようになる植民地が成立する。」⁴というように、この引用文が示す結果となるのである。アメリカの植民地は大きく言って、北部、中部そして南部に大別される。そしてそれぞれの植民地がそれぞれの有能な指導者のもとで、しっかりした政府を樹立し、しかも彼らには民主主義の理念が出来上がっていた。そしてそれぞれの植民地にはそれぞれの特徴のある社会が建設されることとなるのであるがそれについて次のような指摘がある。

当初、各植民地の性格はばらばらであった。たとえば、最も古いヴァージニア植民地には、煙草栽培を中心とするプランテーション農業が発達した。そしてその労働力の担い手であった年季奉公人と呼ばれるイギリスの下層階級出身の人々や、アフリカから連れてこられた黒人奴隷が共に暮らす社会が、ジェームズ川河口の町ジェームズタウンに成立した。⁵

この引用文が示す通り各植民地はそれぞれ独自の道を進み、それぞれ独自の特徴を持つ植民地へと発展していくのである。イギリスからの年季奉公人が労働力となって、ヴァージニアは農業中心の植民地となり、また他の植民地はそれぞれの特徴を帯びながら発展していくのである。そのこと自体は何の問題もない。問題はアフリカから連れてこられた黒人奴隷である。彼らは自分の意思でアメリカへ来たのではない。ヨーロッパからの移民はそれぞれの動機があり、それぞれの自由意思でアメリカへ移住してきたのであるが、黒人奴隷はそうではない。彼らの自由意思ではなく、奴隷として強制的に連れてこられたのである。このことが非常に大きな問題であり、後にアメリカ全体を巻き込むアメリカ最大の危機を招くことになるのである。

黒人奴隷の問題は別に考えてみる必要がある。黒人の件はアメリカの民主主義について考える時非常に重要な要素である。しかしその前にアメリカの民主主義の起源について考えてみなければならない。一般に生活文化というものは通例移民の際にそれぞれの祖国から入植者が持ち込むものである。例えばドイツからの移民者はドイツの生活様式を彼らの文化として持ち込んでいるのである。イタリア人移民はイタリアの生活文化を、スペイン人移民はスペインのものを、といった具合に各国からの移民がそれぞれの祖国の生活様式を文化とし

て持ち込んだのである。しかしアメリカの民主主義は少し異なる性質のものである。ヨーロッパから持ち込んだものではなく、アメリカで始まった独自のものである。それでは独自の特徴を持つアメリカに、どのようにして民主主義が始まったのであろうか。

II. 民主主義の原型

現在のアメリカを見れば、アメリカは確かに民主主義の国であると言えるだろう。植民地時代でもかなり民主的であり、それがより発展して今日のものになったのである。植民地時代、女性には選挙権はなかったが、19世紀に部分的に女性の選挙権が認められるようになり、20世紀には全国レベルの選挙にも女性に選挙権が与えられるようになったのである。確かにアメリカは民主主義の国であり、時代の経過と共により完璧な方向に進展していったと言えるだろう。

アメリカの民主主義について考える前に、その哲学的根幹をなす原則は何であらうか。もし三項目挙げるとすれば、自由、平等そして個人的人権であらう。民主主義の原則である自由、平等、そして個人的人権について簡単に言及してみよう。

民主主義と言えば、まず自由であることの意義を高く掲げなければならないだろう。どんな言動にも自由が与えられなければならない。どこに住むか、何をするか、何ごとにも先ず自由であるというのが民主主義の大前提であらう。誰にも束縛されることなく、意のままに行動することが必須の理念である。民主主義について論じる時、まず自由の意義を認めなければならない。何をするにしても自由であることの価値は極めて高い。アメリカは自由の国であると、あらゆる場で言われている通り自由であることの意義は極めて大きい。

次に身分上の上下関係があってはならない。つまり身分上の階層があってはならない。中世のヨーロッパのように国王を頂点とする身分制度があってはならないということである。その意味では、アメリカには身分制度はない。このように上下関係のない平等であるということが民主主義には不可欠である。

さらに個人の人権が守られなければ民主主義は成り立たない。どんなことにも正当な限り人権が保証されなければ、民主主義はあり得ないのである。このような民主主義の原則に矛盾するアメリカ社会が主人公ハックの視点を通して、

マーク・トウェインMark Twain（1835-1910）の『ハuckleベリー・フィンの冒険』*Adventures of Huckleberry Finn*（1885）の中に皮肉っぽく提示されている。そのことはアメリカの社会をうまく描写していると言えるが、それは別の拙論で言及しているのでここでは詳細を省きたい。⁶

このような原則のもとにアメリカの民主主義があるが、その起源はどこにあるのだろうか。ヨーロッパから移民が持ち込んだのであろうか。ヨーロッパには国王を頂点とする社会的な階級制度があるので、ヨーロッパの慣習をそのまま持ち込んだとは言えないのである。一般的にアメリカの民主主義はメイフラワー号に起源を発すると考えられている。つまりアメリカの民主主義の原型はメイフラワー・コンパクトMayflower Compactである。そのメイフラワー・コンパクトとは何だろうか。専門家の記述を引用してみよう。

ブラッドフォードはまた、1620年11月11日に、メイフラワー号上で交わした誓約も記録しています。これは彼らが新天地に上陸してから作りあげたコミュニティないし社会が個人の契約によって成り立つことを誓う文書で、近代の社会がますます契約的になってきたことを考えるとき、非常に重要な文書なので...。⁷

確かに非常に重要な文書である。アメリカの最初の植民地は1607年、ヴァージニアのジェームズ・タウンにイギリスから移住した人々によって建設された。それは主として経済的な理由からであった。それに対して北のニューイングランドに移住した人々の目的は主として宗教的自由であった。ヴァージニアの植民地より、それより後から植民が開始されたマサチューセッツの植民地の方が、文化的に後世に対する影響が大きいと言える。特に、プリマスに到着した人々の残した足跡が筆舌に値する。それがメイフラワー・コンパクトである。

このことばは「メイフラワー号上の盟約」と言われるもので、アメリカの民主主義の原型をなすものであり、アメリカ社会やアメリカの民主主義について考える上で非常に重要なものである。メイフラワー号とは清教徒とその従者たちが、1620年にアメリカに移住する際に乗って行った船の名前である。新しい大地に上陸する前に船上で交わした約束事がメイフラワー・コンパクトと呼ばれるものである。簡単に言えば、上陸する前にメイフラワー号の上で交わした

約束である。1620年11月、船上で、これから上陸して建設する社会について約束をし署名した、新政府建設に関する協約である。その合意内容を一言で表現すれば、次のように言えるだろう。

上陸する前にこれから建設する社会についての約束である。何事も協議し、全員の自由意思で意見を述べ、そして多数決で決定しよう。そして多数決で決定したことは、それまで反対意見を持っていた者も含めて、全員が従うという約束である。

この考え方はその後のアメリカ民主主義社会を方向づける重大な基盤となっていくのである。そしてこれがアメリカ民主主義の原型と言われるものであり、歴史的に極めて重要なものである。当時女性には選挙権はなく多数決に加われないが、17世紀という時代を考えるとアメリカには世界随一の民主主義が芽生えていたと言えるだろう。しかし歴史的な観点から、その民主主義に問題はなかったのだろうか、という疑問は残るのである。

III. 独立宣言と合衆国憲法

アメリカは1776年7月4日、ジェファースンThomas Jefferson（1743-1826）起草による独立宣言を公布し、イギリスからの分離独立への道を歩むことになるのである。そして独立国として政府を樹立し、憲法を制定するのであるが、その時には既に世界の最先端を行く民主主義国家と認められるのである。

アメリカは1776年に独立宣言を発し、1783年にパリ条約によりイギリスからの独立を承認された後アメリカの憲法を制定している。その憲法は18世紀末という時代を考えると、時代を先取りしていると言える程、破格に民主的である。非常に民主的な憲法である。アメリカ合衆国の憲法について考えてみよう。

1788年6月21日ニュー・ハンプシャーが9番目に批准し、憲法の発効が決定し、アメリカという国家は正式にこの憲法のもとで政治社会が始まることになる。その憲法第1条には、連邦議会とその権限について規定されている。まさしく議会制民主主義を謳ったものである。

第2条では大統領とその権限について規定されている。以下第3条には連邦司法部とその権限、第4条には州と他州及び連邦との関係について規定されている。さらに第5条、第6条に民主的憲法を示す規定を記した後に、第7条に

次の規定が記されているのである。

紀元1787年、9個の州の州憲法会議による承認があるときは、この憲法はその承認を行った諸州の間において確定発効すべきものとする。⁸

この結果1788年にこの憲法は効力を発するのである。当時日本はまだ江戸時代である。そのような時代に制定された憲法としてはまさに民主的と言えるのではないだろうか。合衆国憲法はアメリカの民主主義社会のレベルの高さを測る指標であると言えよう。その後憲法修正箇条を追加することによってアメリカの民主主義はさらに完成度の高いものへと進展していくのである。

これまで述べてきた合衆国憲法の特質は、現在の私たちからすれば民主政治のいわば常識のようなものであり、理念としてはロック・ルソー・モンテスキューが既に理論化していたものであるが、その理論を建国の父祖たちは国家の基本法である憲法の中に見事に制度化してしまったのである。このことは、当時のヨーロッパがいまだ絶対王政や啓蒙専制君主の時代であったことを考えると、まさに破格の先進的なことであつたと言えよう。⁹

この引用文が示す通り、アメリカ合衆国の憲法は本当に民主的なものである。独立直後の時代までに限って言及するならば、アメリカは植民地時代から民主主義の国であつたと認められるであろう。

独立宣言の中に人類の幸福の追求という理想を示す文言が見られる。また独立宣言の中にも民主的な文言を入れようという動きもあつた。次の引用文が示す通り、独立宣言の草案を書いていたとき奴隷解放に言及したという文言があつた。

独立宣言の起草者トーマス・ジェファソンは、原案に奴隷解放も書いています。しかし、奴隷解放を盛り込むと黒人奴隷の労働力に依存していた南部の反対で独立宣言そのものが危うくなることを懸念した多数の意見のため、この部分を消して、奴隷解放の是非は各州の決定にゆだねることにしました。¹⁰

以上のように考えてみるとアメリカは建国当初から民主主義の国である。植民地時代ですら世界随一の民主主義の国である。しかし民主主義の原則を考えると、黒人の地位はどうであっただろうか。看過できないアメリカの一面ではないだろうか。黒人を除いて考えるならばアメリカは植民地時代から民主主義の国である。しかし自由も平等も個人的人権も与えられていない黒人奴隷が存在したということは、アメリカの民主主義の最大の汚点であると言わねばならない。南北戦争によって一応奴隷という制度が形式上廃止されたとはいえ、奴隷制度は人類史上どのように考えても理不尽な制度であったと言えよう。

以前インディアンと呼ばれていた原住民の場合はどうであろうか。彼らはヨーロッパから移民してきた白人によってそれまで住んでいた大地を奪われ、不毛の土地に追いやられていった、というのは歴史的事実である。しかも極めて多くの原住民が殺戮されているのである。アメリカの大地が植民され開拓されたということは、ヨーロッパ人が原住民を殺害し彼らの大地を侵略したということに他ならない。しかしこのような事実はアメリカの民主主義の陰に追いやられているのである。

結 論

上に言及している通り、アメリカは（原住民を除いて考えると）17世紀以降にヨーロッパから移民してきた人々とその子孫が築き上げた国である。民主主義の原型と言われるメイフラワー・コンパクトが示す通り、アメリカは建国当初から民主主義の国であったと言える。現在の民主主義と比べると、植民地時代の民主主義は完全なものではないことは明白である。また独立直後の憲法に見られる、議会制民主主義は現在のものと比すると必ずしも完璧なものとは言えない。

しかし17世紀、18世紀という時代を勘案する必要がある。ヨーロッパは王国ばかりで、階級制度があり、庶民には社会的な身分を変更する自由も経済的な自由もない。そのような時代にアメリカではあらゆる自由と平等が当然のものとして与えられ、しかも個人の人権が保障されていたことを考えるならば、アメリカは当時としては破格の民主主義国家であったと言ってもいいだろう。

17世紀、18世紀のアメリカは民主的な社会であるが、実は女性には選挙権が与えられていなかった。選挙権はなくても「レディー・ファースト」として守られているようであるが、そこには社会の制度としての民主主義に瑕疵があったと言わざるをえない。17～18世紀の民主主義は完璧なものではないが、やがてアメリカ社会はさらに近代化し、より高い民主主義の理想に向かっていくことは19世紀以降の歴史が示している。

それでもアメリカの民主主義には非難されるべき制度上の問題がある。それは奴隷制度である。黒人は自分の意思で移民してきたのではなく、奴隷として強制的にアフリカから連れてこられたのである。黒人奴隷には人権などなく、民主主義とはまったく無縁の境遇に置かれていたのである。自由などまったく与えられず、平等なんてまったく無縁のもので家畜同然の扱いであった。このことを考えるとアメリカの民主主義は黒人や原住民を除外した部分についてのみに当てはまると言えるだろう。南北戦争により形式的には奴隷という制度は廃止されている。しかしそれ以後も黒人の地位は実質的には大きく改善されることなく20世紀を迎えているのである。

この小論においては植民地時代の民主主義を中心テーマとして言及しているが、アメリカは植民地時代ですら他の国々と比較すると破格の民主主義国家であった。しかしそれは黒人や「インディアン」と呼ばれていた原住民を除外してのアメリカである。黒人と原住民を無視していた事実は否めない。それはアメリカの民主主義の瑕疵であり最大の汚点である。

Notes

1. Jessica Kross ed. *American Eras: the colonial era 1600 – 1754* (New York: A Manly, Inc. Book, 1998), p.108
2. 矢野重喜編、『新・アメリカ研究入門』（東京：成美堂2004年）p.163.
3. *Ibid.*, p. 164.
4. 古矢旬他編著『新版 アメリカ学入門』（東京：南雲堂, 2004年）p. 33
5. *Ibid.*, pp.33-34
6. 拙論「『ハックルベリー・フィンの冒険』について：アメリカの民主主義とマーク・トウェイン」武庫川女子大学英文学会 *Mukogawa Literary*

Review, No. 39. 2003年 2 月発行 pp.115-122.

7. 八木敏雄・志村正雄著『アメリカの文学』（東京：南雲堂、1987年）p. 22.
8. 中屋健一編『アメリカ入門12講』（東京：三省堂、1990年）p.249（上の憲法の内容も同書の斉藤真訳pp.241-249より借用している）
9. *Ibid*, p.90
10. 矢野重喜編、*op. cit.*, 164.